

吉見静江(興望館初代館長)

1897(明治30)年5月1日~1972(昭和41年)1月3日



生い立ち

東京府下日暮里の、経済的には恵まれた家庭に誕生しました。2歳の時母が病没し、静江の母の姉夫婦に養女として引き取られました。

15歳の時、養父を失った際、自分が養女であることを知り大きなショックを受けます。けれど、養父母が身も及ばぬ愛情を持って自分を育ててくれたことを感謝することで乗り切りました。

社会事業へ

静江は、若くして英文学を学び、英語の教師として教壇に立ちましたが、その間、生徒の様々な生活環境に触れることで、後に進路を一変させ、社会事業の分野に進み、現場で精力的な活動を行いました。

戦後、請われて厚生事業局の初代保育課長に就任し、退官後は再び児童福祉の世界虚弱児施設「茅ヶ崎学園」を設立し現場に戻ることになりました。

興望館館長に就任

1927年、30歳の時米国へと旅立ちました。「興望館セツルメント」が、事業主任を静江に要請するにあたり、社会事業研究のため派遣したものでありました。

2年の留学から帰国後、婦人宣教師たちから興望館事業主任就任について要請されますが、セツルメントの実態など把握できていませんでした。しかし、婦人宣教師たちの私生活に時間まで割いてまで、都合をつけ、興望館に喜びと希望に燃えて出かけていく姿に心を打たれ、自分もその一人として働きたいとの思いが深まってきました。(自身もキリスト教徒として洗礼を受ける。)

1929年帰国すると、興望館初代館長として迎えられました。

興望館の試練

興望館には、様々な試練がありました。1923年の関東大震災や、1945年3月10日の東京大空襲等です。3月10日早朝、静江は、京成電鉄の線路土手を途方に暮れて歩く被災者達を見て、乳児を抱えた母親達が授乳に困らないように興望館に呼び込むよう職員たちに指示しました。すると大勢の被災者が、保護を求めて興望館になだれ込みました。300人余りに仮眠を勧め、また保育園用の食糧を提供しました。一方これを見た近隣の住民は、家族用の米を提供し興望館に持ち込んできました。食料入手困難な状況にもかかわらず、率先して惜しみなく協力してくれたのです。

静江は、74歳で亡くなるまで、興望館館長として、厚生省保育課長(旧厚生事業局)として、虚弱児施設「茅ヶ崎学園」園長として献身することになります。

『徹底的にローカルな実践を行い、サービスを提供する者と利用者の上に深い感謝と信頼が生まれ地域社会に根付くこと。広い視野に立ち広い範囲の方々との理解と共感が得られるような社会的価値を実現すること。』これが静江の信念であり、モットーでした。

初代館長吉見静江はセツルメントを「文化、教育、社会事業」と訳しました。

参考資料:「興望館セツルメントと吉見静江」2000年12月20日発行 発行者:社会法人興望館

「興望館100周年記念誌 希望への扉」2019年5月1日発行 発行者:社会法人興望館

「興望館セツルメント 75年の歴史」1995年10月21日発行 発行者:社会法人興望館

インターネットより 吉見静江 サーフサイドセツル茅ヶ崎ファーム

(<https://ss7c.com/%E5%80%89%E5%BA%AB/%E5%90%89%E8%A6%8B%E3%80%80%E9%9D%99%E6%B1%9F/>)